

お茶うけ 第33話

蝶道 - 手塚治虫の観察 -

子供の時代に経験したことは、長い間に美化されたり、一部が誇張されたりして、どこまでが本当で、どこからが空想なのか分からなくなることがあります。しっかりした記録を残さなかった悔いだけが残ります。

1940年頃、小学生の夏休みに家族揃って、知多半島の富貴(ふき)の農家の蚕小屋を借りて、一夏を過ごしたことがあります。最初の1日か2日は蚕の臭いが鼻につきましたが、すぐに慣れて海水浴と新鮮な魚の食事の楽しい毎日でした。海に入らない時は、田んぼや畑や草むらにいた、トンボ、蝶、バッタなど昆虫を追いかけ回していました。

そこで不思議な現象を見た記憶があります。晴れた日の夕方、丁度太陽が沈むころ草むらに立っていると、薄暮の空を北(名古屋の方角)から南へ、幾百幾千ものトンボの群れ(たしかヤンマだったと思いますが)が飛来します。1メートルから数メートルの高さの間を、あるいは低くあるいは高く、薄暗い空をさらに薄暗くするように飛んでいきます。竹竿を振り回して、2~3匹は採りましたが、後はただ見とれているだけです。こんな夕方が何日かありました。

最近思い出して、トンボの習性を少し調べてみました。トンボの雄は、池の水面上の一面に縄張りを作って、他の雄は攻撃して追い払い、雌が来るとプロポーズして交尾するという記事はありますが、朝方や夕方に集団で移動するという記事は見つかりません。

図書館の昆虫関係の棚に、『昆蟲つれづれ草』手塚治虫著を見つけました。トンボではなく、「蝶道」の記載がありました。大要を紹介しします。

蝶道は、蝶の往来する道で、蝶にとって心配のない、生活に適した土地を巡って、山野を通過している、蝶の創作した道のことです。(注記、蝶道:チョウ類の中には、オスの飛ぶコースがかなり定まっていて、オスが一定空間を占有する。これを蝶道という。他のオスが進入すると攻撃し、同種のメスを守る習性による)

手塚治虫は、蝶道は、蝶が飛びながら普通には分からない特殊な分泌物を発散させていて、それが彗星の尾のように長く空中に残り、後から来る蝶がその匂いを慕って同じように分泌物を散らしながら従属することで作られると考えます。その証拠に、蝶道は風のある日には、吹きさらしのところでは、大分風下の方に寄っていると言います。

また、蝶道は、森林、道路、池、山、家の上を、ほとんど避けて真っ直ぐに続きます。高さは不定ですが、手塚治虫の調べたところでは、最高は地上17~8メートルで、普通は2~3メートルのところを飛行します。近くに花畑や産卵地などがあるところは、地面すれすれまで降りてきます。

蝶道を飛来する蝶の方向は、ちょっと見るとまちまちの様ですが、長いこと見てみると、ある規則に当てはまっていることに気づきます。宝塚では、午前には蝶の方向が山から平地へ、午後になると反対に山へ山へと向かいます。棲家へ帰るのかもかもしれません。(P-210~212より)

手塚治虫は、大阪の旧制北野中学の1年生から4年生の間に、宝塚や箕面にいる昆虫を観察し、自ら創設した北野中学校の博物班の会誌に、手書きで克明に記載・発表しました。手塚治虫が亡くなってから、当時の昆虫研究会の仲間が、自宅の書庫を整理していて、『昆蟲つれづれ草』(昭和19年3月31日発行)の原本を含む会誌など20冊を見つけました。それは、戦火に焼かれないように、全40冊の半分づつを手塚治虫と2人で分けて持っていたものでした。

市販されている『昆蟲つれづれ草』は、それらの資料を元に復刻したものです。優れた記録文と正確で緻密な昆虫の写生には、ただただ驚くばかりです。後年、手塚治虫が描いたマンガの物語と線画の確かさの源を見る思いがします。

この本には、蝶の飛ぶ方向が午前と午後では逆になるという記事はありますが、トンボについては残念ながらありません。トンボについて、もう少し調べることにします。

(敬称略)

以上

参考文献:

『昆蟲つれづれ草』手塚治虫著 小学館刊 1996年12月20日第1刷